

絵本と信仰



牧師・青田 勇

これは「サンタクロースっているんでしょうか」という有名な本です。今から100年以上前の、1898年にアメリカの新聞「ニューヨーク・サン」に載った社説を訳したこの本が世界各地で出版されました。これを書いたのはフランシス・チャーチという記者です。当時の編集者はその記者について、「人間生活のあらゆる面において、深い洞察力と鋭い感受性を備えた人物であった」と評しています。そのような豊かな想像力を備えていた記者・チャーチは社説の冒頭でまずこう書きました。

「ニューヨーク・サンしんぶんしゃに、このたび、つぎのような手紙がとどきました。さっそく、社説でとりあげて、おへんじしたいとおもいます。この手紙のさしだし人が、こんなにたいせつなしつもんをするほど、わたしたちを信頼してくださったことを、記者一同、たいへんうれしくおもっております。」

幼い筆跡で新聞社に手紙を書いたのはバージニア・オハンロンというニューヨークに住む8歳の女の子です。バージニアはこのような言葉で質問しました。

「きしゃさま あたしは、八つです。『サンタクロースなんていないんだ。』っていつている子がいます。パパにきいてみたら、『サンしんぶんに、といあわせてごらん。しんぶんしゃで、サンタクロースがいるというなら、そりやもう、たしかにいるだろうよ。』と、いいました。ですから、おねがいです。おしえてください。サンタクロースって、ほんとうに、いるんでしょうか？」

バージニアの素直な質問に記者・チャーチが暖かい同情心で次ぎように答えます。

「バージニア、おこたえます。サンタクロースなんていないんだという、あなたのお友だちはまちがっています。きっと、その子の心には、いまはやりの、なんでもうたがってかかる、うたぐりやこんじょうというものが、しみこんでいるのでしょう。うたぐりは、目にみえるものしか信じません。うたぐりは、心せまい人たちです。心がせまいために、よくわからないことが、たくさんあるのです。それなのに、じぶんのわからないことは、みんなうそだときめているのです。けれども、人間の心というものは、おとなのばあいでも、子どものばあいでも、もともとたいそうちっぽけなものなんですよ。わたしのすんでいる、このかぎりなくひろい宇宙では、人間の知恵は、一匹の虫のように、そう、それこそ、ありのように、ちいさいのです。そのひろく、またふかい世界をおしはかるには、世の中のことすべてをりかいし、すべてをしることのできるような、大きな、ふかい知恵が必要なのです。」

このように、記者・チャーチは心に疑いをいだくのでなく、信じる心をもつことが大切であることをバージニアに伝えます。さらに、目に見えないことを信じることは、人間にとっての最も大事な愛と信頼がそこから生まれてくることを次のように語ります。

「そうです。バージニア。サンタクロースがいるというのは、けっしてうそではありません。この世の中に、愛や、人へのおもいやりや、まごころがあるのとおなじように、サンタクロースもたしかにいます。あなたにも、わかっているでしょう。……世界にみちあふれている愛やまごころこそ、あなたの毎日の生活を、うつくしく、しているものなのだということを。もしもサンタクロースがいなかったら、この世の中は、どんなにくらく、さびしいことでしょう。あなたのようなかわいらしい子どものいない世界が、かんがえられないのと同じように、サンタクロースのいない世界なんて、そうぞうもできません。サンタクロースがいなければ、人生のくるしみをやわらげてくれる、子どもらしい信頼も、詩も、ロマンスも、なくなってしまうでしょうし、わたしたち人間のあじわうよろこびは、ただ目に見えるもの、手でさわるもの、かんじるものだけになってしまうでしょう。また、子ども時代に世界にみちあふれている光も、きえてしまうことでしょう。」

ここで言われるようにサンタクロースは信じる人です。サンタクロースはサンタクロースです。お父さんでも、お母さんでもないのです。信じることによりサンタクロースがいることになるのです。これは神も、イエス・キリストも同じです。神は信じるお方です。信じる豊かな世界を持つこと、これがクリスマスです。

信じる心を持つことは、人への思いやりと、優しい心を持つことにつながります。ただ目の前の見えるもの、手で触れるもの、感じるものよりも、目に見えない神を信じる豊かな心を持つようになること、これが私たちにとってのクリスマスの神からのプレゼントです。

クリスマスで信じる世界を心にとりもどし、神がイエス・キリストを私たちに与えてくださったことにより示された神の愛により、日々の生活で愛に満ちた祝福されて送っていききたいものです。

JELC 東京池袋教会の皆様へ教会実習のご挨拶

日本ルーテル神学校 4年生 奈良部 恒平

頌主 お世話になっております。10月から東京池袋教会で実習をさせていただいている、東京教会出身の奈良部 恒平（ならぶ こうへい）です。ご挨拶として、これまでの個人的な経緯とクリスマス伝道について、簡単にお知らせいたしますので、お願いいたします。

私は母親がクリスチャンの家庭に生まれ、日曜日は当たり前のように、教会へ行っていました。当時、通っていた教会では15歳にならないと受洗資格がなかったため15歳のクリスマス礼拝で受洗しました。大学卒業は、就職氷河期といわれる時代でしたが、神様は祈りに応えて仕事を与えてくださいましたし、転職も経験しました。そのころ、ルーテル教会の牧師になっていた従兄弟（関野和寛牧師）が婚約すると知り、婚約式に出席するために、東京教会の礼拝へ出席しました。そのルーテル教会の礼拝式に心を打たれ、ルーテル教会への転入に導かれました。その後、結婚を機に、今住んでいる日野市に引っ越しました。子どもが与えられ、30代前半は、ある意味で、とても充実した日々でした。教会ではCSのスタッフとして奉仕し、将来的には一信徒として教会の役員をしながら、牧師や教会を支えて行かなければならないという責任を感じていました。そんな平穏な状態の時に、教会の牧師から「来年度の献身者が、一人も与えられていない」という話を聞きました。その時、使徒パウロが「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」（一コリ12：27）というように、私もキリストの身体の一部だったと気がつかされました。牧師になりたいという衝動にかられましたが、椎間板ヘルニアで緊急入院することになりました。この病氣療養中、聖書を読み、祈り、色々と考える時間が与えられました。妻は神学校へいくことに賛成してくれました。病気の症状もほぼ治まり、全速力で走ったり、重い物を持ったりすることは出来ませんが、日常生活が不自由なくおくれるまでになりました。神学校を受験し、入学を許され、10年余りに及んだ社会人生活にピリオドを打ち、神学校での学びが始まり、今年で4年目になりました。

一昨年には長女も与えられ、4人家族になりました。2児の子育てをしながら神学校で学んでいるので、大変なことも多いのですが、卒業論文『ルターにおける終末論的な生』を書き上げることができました。そして、皆様とクリスマスに向けて、こうして信仰の歩みを共にできますことを、とても嬉しく思っております。天地万物を創造された神様が、私たちに本当の愛を具体的にあらわして下さったことを、イエス・キリストの誕生をお祝いするクリスマスを通して、人々と心から分かち合うことができるように、神様の助けによって御言葉の働きに励んで行きたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

栄光在主

教会の主な集会・行事予定

- ◆ 12月 4日(日)礼拝後、 ミニバザー
- ◆ 12月11日(日)礼拝後、 定例役員会、手話の会
- ◆ 12月13日(火)午後2時 婦人のクリスマス会
- ◆ 12月14日(水)午後2時 聖書に学ぶ 第二テモテ4章16節以下
- ◆ 12月18日(日)礼拝後、 教会のクリスマス祝会
- ◆ 12月24日(土)午後7時 クリスマス・イブ礼拝(ピアノ演奏)
- ◆ 1月 1日(日)午前10時半 主日礼拝・新年礼拝
- ◆ 1月 8日(日)礼拝後、 定例役員会、手話の会
- ◆ 1月11日(水)午後2時 聖書に学ぶ ヨハネ福音書 1章1節以下
- ◆ 1月15日(日)礼拝後、 婦人会
- ◆ 1月17日(火)午後2時 婦人の聖書会 ルカ福音書 22章24節以下
- ◆ 1月25日(水)午後7時 聖書を読む会
- ◆ 2月 5日(日)礼拝後、 教会総会
- ◆ 2月 8日(水)午後2時 聖書に学ぶ ヨハネ福音書 1章6節以下
- ◆ 2月12日(日)礼拝後、 定例役員会、手話の会
- ◆ 2月19日(日)礼拝後、 婦人会
- ◆ 2月28日(火)午後2時 婦人の聖書会 ルカ福音書 22章31節以下